

# 中部支部に在籍して

金子 美博

OR 学会中部支部での活動について、学会に入会してから今日に至るまで、一会員としての立場から述懐する。続いて、支部活動の現在と今後について、支部長としての立場から見解を述べる。取り巻く環境は、支部により異なるものの、本報告が支部運営の何らかの参考になり、OR 普及と発展につながることを期待する。

キーワード：支部活動報告、幹事団と事務局、OR 普及

## 1. 支部での今日までの歩み

1994 年春、どこかの学会の研究会で、豊橋技術科学大学の増山繁先生と初めてお会いしたとき、オペレーションズ・リサーチ学会（以下、OR 学会）の名前を知った。当時、増山先生は、OR 学会中部支部の研究幹事をされていた。先生は岐阜大学の大学院でも講義をされており、筆者は個人的に親近感もあり、お誘いいただいたその年 5 月の南山大学での春季全国大会に参加することになった。これが OR 学会と筆者の最初の出会であった。

初めての全国大会では、興味深い研究発表がいくつもあり、大変有意義な学会参加であった。懇親会も初参加の筆者には、知らぬ存ぜぬの顔ばかりであったものの、参加者のネームプレートをちらっと見てみると、いるわいるわ有名な人がそこかしこに、教科書や論文でしか拝見したことがないマイ有名人が至る所にお目見えしていた。名前と顔の一致に感動すら覚えた。そのような流れで、迷うことなく OR 学会に入会することになった。その後、関連する若手の団体 SSOR にも参加させてもらった。入会当時、OR 学会には、多数の著名な研究者だけではなく、元気で活きのいい若手も大勢いるという印象が強かった。現在、その中の多くの方々が OR 学会を牽引している状況を見る限り、我ながら見る目があったと自画自賛している。

入会后間もなく、筆者の自宅に、中部品質管理協会なる団体からダイレクトメールが届くようになった。しかし、そのような協会に覚えはなく、当時は、物騒な郵便物が世間を賑わせていたご時勢でもあったため、ゴミ箱直行便となっていた。後ほど、その郵便物が OR 学会中部支部事務局からのもので、支部ニュースとい

われる伝統的な刊行物であることがわかった。正直なところ、一地方支部が、事務局まで持って精力的に活動していることなど夢にも思っていなかった。中部支部研究幹事の役職も、本部の研究事業か何かの中部地区担当くらいにしか思っていなかった。

その後、定期的に支部事務局から届けられる支部ニュースにより、講演会などの活動や忘年会などのイベントを知るようになった。中部支部の活動として特徴的なのは、ほぼ毎月 1 回土曜日午後に行うこと、また、会場である中部品質管理協会が、名古屋駅そばの豊田ビルという極めて便利な場所にあること、の 2 点であった。一般に、学会は平日に催されることが多いため、中部支部のイベントは、日程的に重なることなく、筆者にはありがたかった。大名古屋ビルヂングなど、賑やかな名古屋駅周辺の光景にも触れられるため、美濃の片田舎からきよろきよろとあちこち見上げながら会場入りする筆者には、実に魅力的な週末となった。

初めての支部懇親会では、中部支部で活躍されている方々から名刺をいくつも頂戴した。その数は 20 を超えた。最初は名前と顔は一致しなくても、交流が深まれば、やがて一致するであろうと期待した。その後、数年経過して、増山先生と同じく、筆者も支部研究幹事を仰せつかったものの、先生のご活躍には遠く及ばず、幹事としての力量不足を痛感したことを覚えている。

時は流れ、入会してから 20 年以上経過した。その間、土曜日午後・名古屋駅周辺での開催、という二つの特徴は辛うじて引き継がれている。次期支部長となる副支部長を打診されたとき、その光栄さは身に余る一方で、果たして力量不足の自分に務まるのか、という不安があった。しかし、幸いなことに、中部支部は、支部事務局（現在はシグマフィールド株式会社）や、副支部長と研究幹事・庶務幹事・広報幹事の幹事団、監事や顧問、それに多数の運営委員が名を連ねている [1] ため、支部運営に関しては心強い限りであることがわ

かねこ よしひろ

岐阜大学工学部

〒 501-1112 岐阜県岐阜市柳戸 1-1

かっていた。また、筆者自身も他学会のシンポジウム [2, 3] に関わっていて、同時進行させることへの不安もあった。とは言え、結局は運営組織の違いにより、中部支部の特徴が再認識でき、それを伸ばす方向にやり甲斐を感じたため、副支部長を引き受けることにした。

## 2. 現在の中部支部

中部支部での現在の主な支部イベントを挙げると、次の三つが恒例となっている。

3月 支部総会・特別講演会・支部研究発表会

9月 支部シンポジウム

12月 年末支部講演会

これら以外の支部講演会や支部研究会も年に何回かある。現在、講演会と研究会とは明確な区別がなくなっている。支部予算が潤沢にあったときは、支部の1年間のテーマを決め、それに基づいて研究会を企画していた。支部研究会はその名残とも言える。なお、どのイベントにも懇親会が用意され、参加者の交流が促進されるように支部として心がけている。

以下、個々のイベントについて簡単に紹介する。

支部活動の年度末は2月であるため、3月が年度の最初のイベントである。その日は、幹事会や運営委員会を経て、支部総会になる。総会の後に、中部支部所属の学生会員による研究発表会が行われる。優秀な発表には、シグマフィールドさんから金一封が贈られることもあり、近年は発表件数が増加傾向にある。また、優秀発表は、研究普及委員会に報告される。さらにその日の特別講演は、中部支部の顔とも言うべき方を講師に招いているうえに、総会と研究発表会もあるため、参加者がいつにも増して大盛況である。会場の椅子が足りなくなることもある。

9月の支部シンポジウムは、支部イベントの最大の目玉である。近年、本部への予算申請を伴う支部事業である。支部シンポジウムの特徴の一つは、遠方の著名な研究者を招待できることにある。支部予算の都合上、普段の支部講演では、遠方の方は呼べないため、支部としても準備に自然と力が入る。研究幹事が中心となり、シンポジウムの企画について、幹事会で議論を重ねながら練り上げ、支部事業の申請を行っている。その甲斐あってか、ここ数年の中部支部シンポジウムは、数十名もの参加者があり、またもや会場の椅子を心配するくらいの盛況である。1年間で最も華のある支部イベントになっている。

12月は、忘年会も兼ねた講演会があり、年によっては、顧問の先生方との懇談など、1年間の支部活動を

振り返る機会となっている。

このほかの最近の支部活動として特筆すべきは、高大連携がある。平たく言えば、大学教員が、大学の宣伝も兼ねて高校に出前授業を行うことである。中部支部では、授業の題材をソルバーに絞って、エクセルユーザの高校生を対象に、2時間ほどの授業を、幹事団や運営委員の有志を講師として派遣している。支部としては、金の卵たちに、将来 OR 学会の会員になってもらうよう、学会の宣伝も忘れずに、とお願いしている次第である。数年先の成果が楽しみである。

また、新たな支部活動の一つとして、2015年度は、お隣の関西支部との合同講演会も行った。講師および演題は以下のとおりである。

・福島雅夫先生（南山大学理工学部教授・京都大学名誉教授）

「相補性を巡って」

・巳波弘佳先生（関西学院大学理工学部教授）

「一期一会の数理と災害時情報通信技術」

・柳浦睦憲先生（名古屋大学情報文化学部教授）

「レクトリニア図形のパッキング」

講師のネームバリューのおかげで、多数の参加者があり、盛況であった。他支部と協力しながらの共催講演会の企画と開催は、支部運営の情報交換なども含め、大変勉強になり、副産物の多いイベントとなった。

## 3. 今後の中部支部

最後に、今後の支部活動について言及したい。

残念ながら、ビルの解体などにより、駅そばの豊田ビルという、便利な会場が今はもう存在すらない。そのため、名古屋駅周辺にサテライトキャンパスのある大学関係者に会場の提供をしてもらっている。名を挙げると、愛知県立大学さんや名城大学さん、愛知大学さんに大変お世話になっている。とりわけ、愛知県立大学の奥田副支部長には、イベントの候補日を定めるごとに、会場の予約可否の確認から確定後の手続きや当日の会場設営と後片付けなど、支部イベントの現場の一切を頼り切っている。1年間で見てみると、その負担の合計は看過できない。もし、名古屋駅周辺の会場が確保できない場合は、それ以外の会場を見つけなければならない。会場探しについては、幹事団や運営委員だけでなく、広く中部支部の会員の方々からもご協力を切にお願いしたい。

また、研究部会の誘致にも支部として力を入れたい。たとえば、東京と大阪で交互にイベントを開催している研究部会があれば、ぜひ、経由地の中部支部でも開



2015年3月 中部支部研究発表会のひとコマ

催していただければと思う。中部支部にてさまざまな部会が頻繁に行われれば、支部活動が活発になることは容易に予想される。

さらに、中部支部では、大勢の支部役員がいる。筆者が最初に幹事をしていた頃は、支部長と副支部長、2人の幹事、中部品質管理協会の事務の方のわずか4~5人で支部業務を行っていた。今とは比べられないくらい幹事の業務が多岐にわたり、かつ、その大変さが知られていたため、当時の支部長は幹事探しには大変苦勞されていた。現在は、事務委託しているシグマフィールドさんを含め、10名ほどの幹事団が支部運営の中心となり、業務が分散され、各幹事の負担軽減につながっている。そのため、次の幹事を探すことは比較的容易になった。若手の学会員が支部運営に少しずつさまざまな形で関わりながら、将来の学会運営の礎になればと思う。負担分散の幹事団体制を、中部支部は今後も堅持していければと思う。



2016年1月 関西支部との合同講演会

限られた支部予算で、いかに活気ある支部活動を行うかは、どの支部にも当てはまる課題であろう。中部支部の場合は、名古屋駅周辺に限るのがよいのか、名古屋駅以外の支部各地でも開催するのがよいのか、特に結論は出ていない。このことも含め、支部運営に関して、幹事団が中心となって今後も大いに議論し、支部活動が盛り上がる方法を模索しながら前に前に進むことを願ってやまない。

#### 参考文献

- [1] “2015年度支部総会報告,” オペレーションズ・リサーチ: 経営の科学, **60**(9), p. 569, 2015.
- [2] 金子美博, 前田義信, “ブーメランとなって分厚い教科書にぶち当たろう,” 電子情報通信学会 基礎・境界サイエティ Fundamentals Review, **8**(4), pp. 325-326, 2015.
- [3] 金子美博, 小野峻祐, 柴田誠也, 高岡旭, “博士課程って面白いよー博士後期課程を経験してー,” 電子情報通信学会 基礎・境界サイエティ Fundamentals Review, **9**(3), pp. 253-255, 2016.